

令和元年度 指導案集

1. はじめに	校長	川副 博史	1
2. 表現	幼稚部	岩田 美穂	2
3. 理科（5年）	小学部	丸橋 由佳	9
4. 自立活動・音楽活動（1・2・4・5・6年）※	小学部	辰巳 純子	17
5. 自立活動・ADL（身体）（1・2・3年）※	中学部	辰己 祐幸	19
6. 現代文B（2・3年生A類型）	普通科	吉岡 直也	26
7. 英語（1・2・3年生B類型）	普通科	西村 彩	31
8. 生活と疾病（臨床医学総論）（専攻科保健理療科2年）※	理療科	福本 大輔	37
9. 生活と疾病（専攻科理療科2年）※	理療科	藤本 勲	39

※は指導略案

大阪府立大阪北視覚支援学校

はじめに

本校は視覚に障がいのある幼児児童生徒を対象にした特別支援学校です。

幼児児童生徒の個々の実態に応じた専門性の高い教育を行い、社会参加への力を育成することを目標に掲げています。本校では年々、幼児児童生徒の障がいの重複化が進んでいます。また幼児児童生徒数も減少傾向にあり、それに伴い、転勤や退職で教員数も減少してきています。その中で、学校組織としての視覚障がい教育の専門性の維持・継承・発展のために、教科指導や重複障がい幼児児童生徒への実践と記録を重ねることが求められています。

そのような現状の中、平成29年度より「すべての教員が3年ごとに一度研究授業を実施し、授業力の向上と視覚障がい教育の継承を図る」ことを掲げ、3年間全校を挙げて研究授業に取り組んでまいりました。次年度以降も継続して研究授業を行えるよう、指導と評価の年間計画（シラバス）の作成と併せながら、体制を構築しています。また学部を超えた各教科などでの点字や拡大教材データの共有もすすめています。

残念ながら新型コロナウイルスの影響で年度末に予定しておりましたいくつかの研究授業が中止となってしまいましたが、本冊子には、今年度実施された研究授業の学習指導案8本を収録しています。本冊子は、本校教職員及び多くの教育関係者に公開することで、多方面からご示唆をいただき、さらなる本校の授業改善と視覚障がい教育の維持・継承・発展へと繋げていくことを目的としています。

皆様からの忌憚のないご意見やご指導を賜りますようお願いいたします。

令和2年3月吉日

大阪府立大阪北視覚支援学校
校 長 川 副 博 史

「表現」 保育指導案（細案）

指導者	T 1	岩田	美穂
	T 2	廣瀬	葵
	T 3	久保	明日香

1. 日 時 令和元年〇月〇日（〇） 第3時限（10：50～11：35）
2. 対 象 幼稚部3・4歳児 幼児3名
3. 場 所 幼稚部そらの部屋
4. 単元名 「おはなし遊び」
5. 単元の目標
 - ・友だちや教師と一緒におはなし遊びを楽しむ。
 - ・おはなし遊びを通して、友だちとイメージを共有し遊ぶことの楽しさを知る。
 - ・おはなし遊びを通して、内容の理解を深め、ことばのイメージを豊かにする。

6. 指導にあたって

（1）幼児観

今年度の幼稚部は5歳児1名、4歳児3名、3歳児3名の7名が在籍している。幼稚部全員での集団的関わりを大切にした活動に取り組みつつ、主に幼児の実態に合わせた2グループに分かれて活動する日も設定している。

本グループの幼児は、前年度から在籍していた4歳児2名、新たに3歳児1名を加えた計3名である。保育所と併通している幼児が1名、リハビリ訓練に通う子どもが1名おり、曜日や日によって登校人数が変わる。全盲児1名、弱視児2名で見え方の様子もそれぞれ異なるが、新入児も1学期の生活を通して幼稚部が安心して過ごせる場となり、全員が見通しを持って幼稚部生活を送ることができている。言葉を主なコミュニケーションの手段としており、教師や友だちとの言葉でのやりとりを楽しんでいる。3人とも、リズムの時間、リトミックの時間のどちらにも期待感を持ち、「友だちがやっているから私もやってみる！」と少し難しい事にもチャレンジしてみる意欲にあふれ、刺激し合っている様子が見られる。自由遊びの時間には「おままごと」「積み木遊び」等の簡単な見立て遊びを展開している。4月当初はまだまだ教師を相手にやり取りして遊ぶことが多かったが、繰り返し遊ぶ中で少しずつ友だちに話しかけて簡単なやりとりを楽しんだり、友だちを思いやるような発言が聞かれたりするようになりつつある。しかし、その遊びの内容や展開の幅はまだ狭く、パターン化された遊び方や発言の繰り返しになる事が多い。視覚に障がいのある子ども達なので、状況を見て把握したり、真似たりする事が難しく、友だち同士のやりとりに繋がったり、様々な物や道具を使って遊んだりするにはまだまだ教師の支援を必要とすることが多い。そのため、リズムの時間にはなるべく多くの実物を実際に触って「見る活動」「わかる活動」（目で見ただけでなく、手を使ってみる・匂ってみる・音を聞く・感触を確かめる等の様々な触れ方を含む。）を大切にしてきている。1学期のリズムの時間には、子どもたちの大好きな、季節や活動に沿った様々な絵本を導入に取り入れてきた。おはなしを通して、実際の物に触れ、匂ったり、聞いたり、また製作で再現する等して、それぞれの子供達を感じたことを発表しあったり、聞いたりして、友だちとイメージを共有したり、いろいろな思いや考え

に気付いていけるような活動も意識して取り入れてきた。そういった経験を重ねることにより、少しずつ数や、自然などにも興味が広がり、「これ10本あるね。」と思った事を発言したり、友だちの意見をよく聞き、「どうして〇〇なの？」と友だちに質問をしたり、自由遊びの場面でも「一緒に遊ぼう」と誘いかけたりする場面が増えてきつつある。

(2) 教材観

少しずつ子ども同士の関わりが増えてきたので、子ども達の大好きな絵本を通して、「おはなしの世界の楽しさや面白さ」、「友だちとイメージを共有して遊ぶ楽しさ」、「感じたことや考えたことを、役になりきって表現する楽しさ」など、一人では味わえない楽しさを存分に味わって、「やっぱり友だちと一緒に楽しいな」と感じて欲しいと考えた。

最近では、少しずつ数や自然などにも興味が広がり始めていることから、「わら」「木」「レンガ」など、身近に存在し、重さや質感などがはっきりとわかる素材が出てきて、簡単なやり取りを楽しめる、「3びきのこぶた」を題材に取り上げる事にした。

(3) 指導観

「わら」や「木」の家は吹けば飛んでいってしまうが、なぜ「レンガ」の家は飛んでいかなかったのか、といったところも、実際の「わら」「木」「レンガ」を触り、その匂いや大きさ、重さ等を触って体感させイメージを持てるようにしたい。また、最初は子ども達が「こぶた」役を繰り返し経験しながら、実際の体験と動きを元にストーリーを理解し、おはなしの世界のイメージを深められるようにしていきたい。繰り返し遊ぶ中で、おはなし遊びの体験から生まれる子ども達の言葉を引き出しながら、子ども達同士の気持ちやセリフの言葉でのやりとりを大切に、楽しさや充実感を得られるようにしていきたい。

7. 指導計画（全6時間、本時は第6時）

時	ねらい	主な活動内容	環境の構成と保育者の援助
1	<ul style="list-style-type: none"> ・「3びきのこぶた」のおはなしを楽しむ。 ・わら、木、レンガの実物に触れて、大きさや重さなどに気づいたり、感じたりして楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「3びきのこぶた」のおはなしを聞き、わら、木、レンガなどに触れ、実体験から言葉や感触でイメージを豊かにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・イメージを膨らませられるように表現豊かに絵本を読む。 ・わら、木、レンガなどの質感や重さに気づいたり感じたりした時には、その気持ちを表現しようとする姿を見守り、共感し、じっくりと楽しめるように配慮する。 準備物：紙芝居2冊、わら、木、レンガ、スズランテープ、くぎ、金づち
2	<ul style="list-style-type: none"> ・「3びきのこぶた」のおはなしを楽しむ。 ・友だちや教師と一緒に「おはなし遊び」を体験し、 	<ul style="list-style-type: none"> ・「3びきのこぶた」のおはなしを聞き、こぶたになって、オオカミ役の教師とのやりとりを 	<ul style="list-style-type: none"> ・もう一度絵本を読み、おはなしを思い出せるようにする。 ・こぶた達がどのような事をしてきたか、どのような発言をして

	楽しむ。	楽しむ。	いたかなど、問いかけたり手がかりを伝えたりしながら、一人ひとりが安心して自分なりに表現をして楽しめるように配慮する。 準備物：紙芝居2冊、わら、木、レンガ、エアレックスマット、板段ボール、こぶたとオオカミの帽子、おもちゃの金づち
3	・友だちや、教師と相談しながら、「3びきのこぶた」の家を作り、イメージを膨らませる。	・「3びきのこぶた」のお家を作る。	・「3びきのこぶた」の家をすることを提案し、どのような家があったのか、思い出せるように言葉がけをする。 ・大まかな作り方は助言する。子ども達がそれぞれの家のイメージを持ち、どのように作りたいか、どのように作るのか、皆で共有出来るよう、教師が間に入り、丁寧に言葉と動作で伝える。 準備物：紙芝居2冊、わら、木、レンガ、段ボール、両面テープ、ボンド、スズランテープ、布ガムテープ、大型スポンジ積み木、模造紙、ブルーシート
4	・自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりして楽しさを味わう。	・3匹のこぶたになって実際に家を作り、おはなし遊びを楽しむ。	・前回までの活動を思い出し、こぶた達がどのような事をしていたか、どのような気持ちだったか等、問いかけながら、一人ひとりが安心して自分なりに表現をして楽しめるように配慮する 準備物：紙芝居2冊、エアレックスマット、段ボールの家、そり、わら、木、レンガ、大型スポンジ積み木、こぶた・オオカミ・木こり等の衣装、おもちゃの金づち
5	・自分のイメージを動きや言葉で表現したり、演じて遊んだりして楽しむ。	・役に分かれて、実際に家を作り、おはなし遊びを楽しむ。	・前回までの表現を振り返りながら、さらに表現が深められるようにする。 準備物：エアレックスマット、段ボ

	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちや教師と同じ目的やイメージを持っておはなし遊びを楽しむ。 		ールの家、そり、わら、木、レンガ 大型積み木、こぶた・オオカミ・木 こり等の衣装、おもちゃの金づち、 石、火
6	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちと同じ目的やイメージを持っておはなし遊びを楽しみ、充実感を味わう。 ・思ったり、考えたりしたことを自分なりの言葉で表現する。 ・友だちの話に興味や関心を持ち、親しみを持って聞いたり、話したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・役に分かれて、実際に家を作り、おはなし遊びを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりの発想や、表現に共感をもって受け止め、友だちや教師とおはなしのイメージを共有し、表現する楽しさを味わえるようにする。 準備物：エアレックスマット、段ボールの家、そり、わら、木、レンガ、大型積み木、こぶた・オオカミ・木こり等の衣装、おもちゃの金づち、石、火

9. 本時の展開

(1) 本時の目標

- ・友だちと同じ目的やイメージを持っておはなし遊びを楽しみ、充実感を味わう。
- ・思ったり、考えたりしたことを自分なりの言葉で表現する。
- ・友だちの話に興味や関心を持ち、親しみを持って聞いたり、話したりする。

(2) 本時の活動の流れ

時間	活動内容	環境の構成と保育者の援助
10:50 導 入	<ul style="list-style-type: none"> ○はじまりのあいさつをする。 ・ぱんだグループの歌を歌う。 ・手遊び「チョッキンむし」 ○前回までのおはなし遊びを思い出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・はじまりが意識出来るように、T1はメリハリをつけて話す。 ・前回の様子を振り返れるように言葉をかける。
11:00 展 開	<ul style="list-style-type: none"> ○役を決める。 ・役が決まったら、役の衣装を身につける。 ○部屋の配置を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・やりたい役が重なった時には、それぞれの子どもの思いを受け止めつつ、決められるように支援する。 ・位置がわかるように、T1がそれぞれの場所で音を鳴らして配置の確認をする。T2と実際の場所に移動して確認する。
11:05	<ul style="list-style-type: none"> ○おはなし遊びを始める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども自身が役になりきって、存分におはなし遊びの楽しさを味わえるように、子どもの様子に合わせて進行するようにする。

- ★母さんぶたに言われて家を出る。
- ・一番上の兄さんぶたを先頭に部屋を一周し、箱椅子へ戻る。

★わらの家（歌1）

- ・百姓に出会う。
- ・百姓から貰ったわらを、そりで運ぶ。
- ・家を作る。
- ・オオカミから逃げる。（わらの家から箱椅子へ戻る）

★木の家（歌2）

- ・木こりに出会う。
- ・木こりから貰った木を、そりで運ぶ。
- ・家を作る。
- ・1番目のお兄さんぶたが逃げてくる。
- ・オオカミから逃げる。（1番目、2番目の兄さんぶたは木の家から箱椅子へ戻る）

★レンガの家（歌3）

- ・職人に出会う。
- ・職人から貰ったレンガ（大型スポンジ積み木）をそりで運ぶ。
- ・家を作る。
- ・1番目、2番目の兄さんぶたが逃げてくる。
- ・3匹で暖炉に火をくべる。（レンガの上に枝をくべる）

- ★オオカミがえんとつから入り、やけどをして逃げていく。

- ★3びきのこぶたは喜び仲良く暮らす。（歌4）

- ・ストーリーなどがわからなくなる子どもがいた場合には、一緒に状況など確認しながら自分の役がどのような気持ちなのかなど、思い出し、発言が出来るように支援する。

- ・T1は待っている子どもにも、おはなし遊び中の友だちの様子がわかるように言葉で伝え、おはなし遊びを楽しめるようにする。また、T2は全体の進行では分かりにくい細かな様子を、待っている子ども達に小さな声で伝え、おはなし遊びを楽しめるようにする。

- ・T2がオオカミ役だった場合には、低い声や怖そうな言い方をし、こぶた達が食べられそうで怖いと感じられるように演じる。こぶた役だった場合には、普段子ども達から聞かれるセリフを中心に、違った言い方も使用して、様々な伝え方がある事を知らせる。

- ・移動の際は安全に移動出来るよう様子を見守る。T1～T3は進行方向が分かるように、それぞれの場所で音や声で知らせる。

- ・小道具をセットする際には、子ども達に危険がないように配慮する。

- ・幼児の気持ちや話が逸れた時には、気持ちを受け止めつつ、声をかけおはなし遊びに戻れるように促す。他児の出番や話の進行中の場合には、T2がさりげなく声をかけ、おはなし遊びに集中出来るように促す。

- ・T3は百姓、木こり、職人になりきり、子ども達から発言を引き出せるように、ゆっくりとやりとりをする。

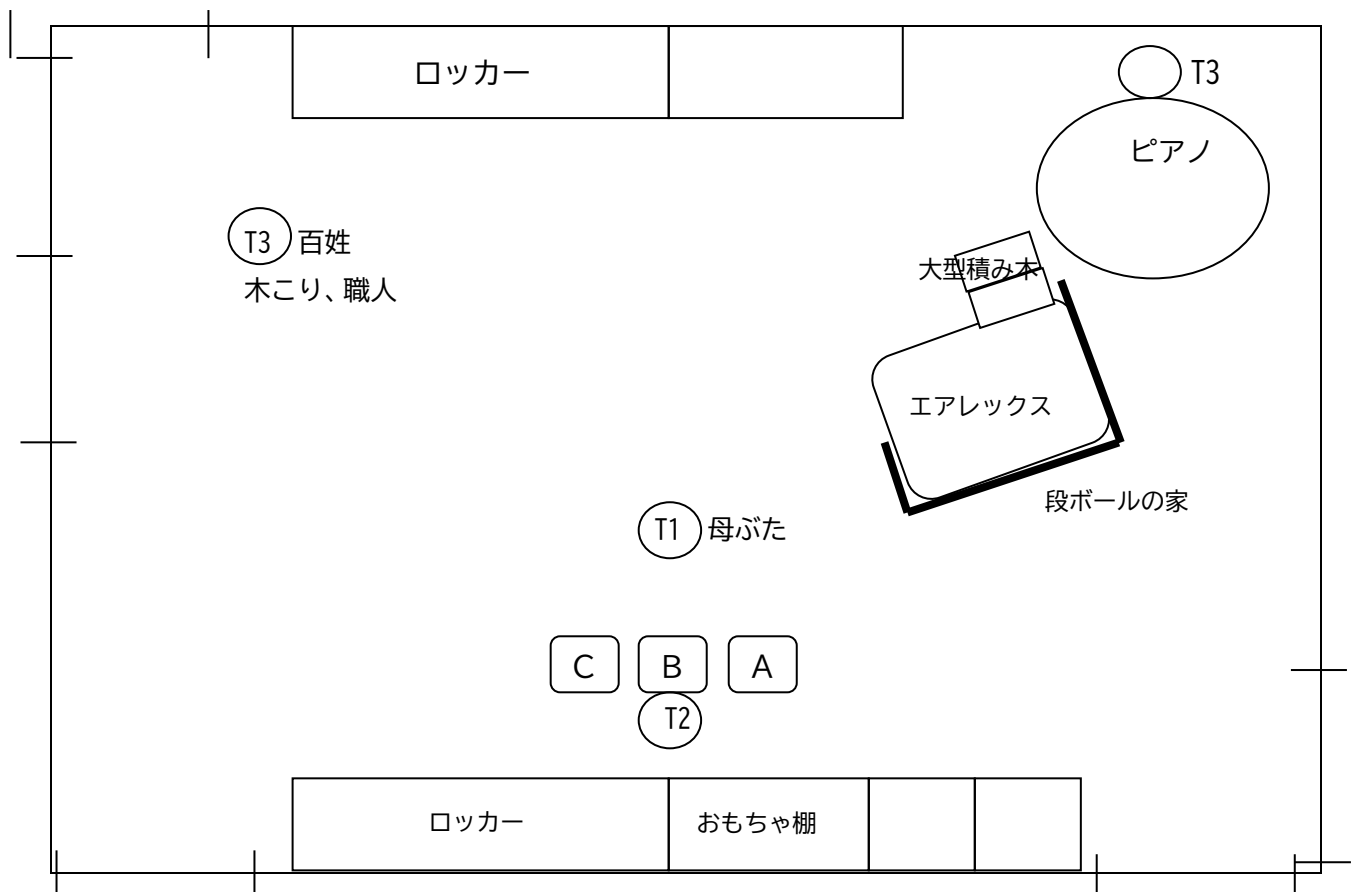
- ・T3は、子どもの発言などのタイミングに合わせて、効果音のピアノを弾く。

11:30 ま と め	○楽しかったことや、頑張ったことを発表する。 ○終わりの挨拶をする。	・楽しかったことや、頑張ったことなどを友だちに伝えることで経験を共有できるようにする。 ・皆でおはなし遊びを作り上げた喜びを共有できるように言葉がけをする。
----------------------	---	---

準備物：エアレックスマット、段ボールの家、そり、わら、木、レンガ、大型スポンジ積み木、こぶた・オオカミ・木こり等の衣装、おもちゃの金づち、紙芝居2組、石、火

※ 今回の保育では、オオカミが悪者であるという前提でのお話だったが、研究保育終了後、後日『ともだち くるかな』『ごめんね ともだち』という、絵本を読む予定にしている。友だちと仲良くしたいと思っているオオカミの話を読み、いろいろなオオカミの話に触れられるようにしたい。

(4) 活動環境の配置等（正面を上にして、幼児や保育者の位置、準備した教材・教具の位置等を示す）



資料1

「お家をつくろう」の歌
（「きゅうりができた」の替え歌）

1 おうちをつくろう おうちをつくろう
わらのおうちを つくりましょう

わらをばさばさ わらをばさばさ
すてきなおうちが できました

2 おうちをつくろう おうちをつくろう
木のおうちを つくりましょう

木をトントン かなづちでトントン
すてきなおうちが できました

3 おうちをつくろう おうちをつくろう
レンガのおうちを つくりましょう

レンガをよいしょ レンガをよいしょ
じょうぶなおうちが できました

4 みんななかよし 3びきのこぶた
ずっとなかよく くらそうね

みんななかよし 3びきのこぶた
ずっとなかよく くらそうね

「理科」 学習指導案（細案）

指導者 T 1 丸橋 由佳
T 2 伊坪 朋子

1. 日 時 令和元年〇月〇日（〇） 第3時限（10：50～11：35）
2. 対 象 小学部5年生 児童3名
3. 場 所 小学部4組B教室
4. 単元名 「物のとけ方」
5. 単元の目標（ねらい）
 - ・食塩などが水に溶ける現象に興味をもち、物が水に溶けるときの決まりについて捉えることができるようにする。
 - ・物が水に溶けるときの決まりを利用して、溶けている物を取り出せることを捉えることができるようにする。

6. 指導にあたって

（1）児童観

本学級は5、6年生の児童5名からなる複式学級である。理科においては、児童の実態に合わせたグループ学習をしている。本グループの児童は5年生3名で、全盲が1名、弱視が2名。3名とも点字を使用して学習している。

理科の観察や実験などに興味を持ち、意欲的に取り組むことができる。観察や実験の際は、手順が分かり、安全に気をつけて取り組もうとしている。しかし、少人数の学級であることと、生活経験・情報量の少なさなどから、予想をするときなどに、考えが広がりやすく、多様な視点から考えることが難しい場面も見られる。また、自分たちで必要な条件を考え、計画を立てて実験を行う経験はまだ少ない。そのため、調べたいことを考えたり、自分なりの予想を立てたりすることはできるが、本筋からずれてしまうことがある。実験の内容や実験結果を正しく理解することは概ねできている。しかし、実験結果を活用して考えたり、身の回りの事象や既習事項などと関連づけて捉えたりすることは苦手な様子も見られる。

（2）教材観

本単元では、食塩やミョウバンなどを水に溶かしたり、水に溶けたものを取り出したりする実験を通して、「物が溶けても全体の重さは変わらない」ことと、「物が一定量の水に溶ける量には限度がある」こと、「水の温度による物の溶ける量は溶かす物によって変わる」ことを捉え、物の溶け方の規則性を理解するとともに、それらについての見方や考え方を持つことをねらいとしている。本単元では実験が多いため、児童が自ら意欲的に調べ、結果を導き出したり、結果から科学的な思考や概念を表現したりする力につながると考える。また、塩や砂糖など身近なものをを用いることで、生活の中の事象と関連づけて考えることができ、意欲にもつなげることができると考えられる。

(3) 指導観

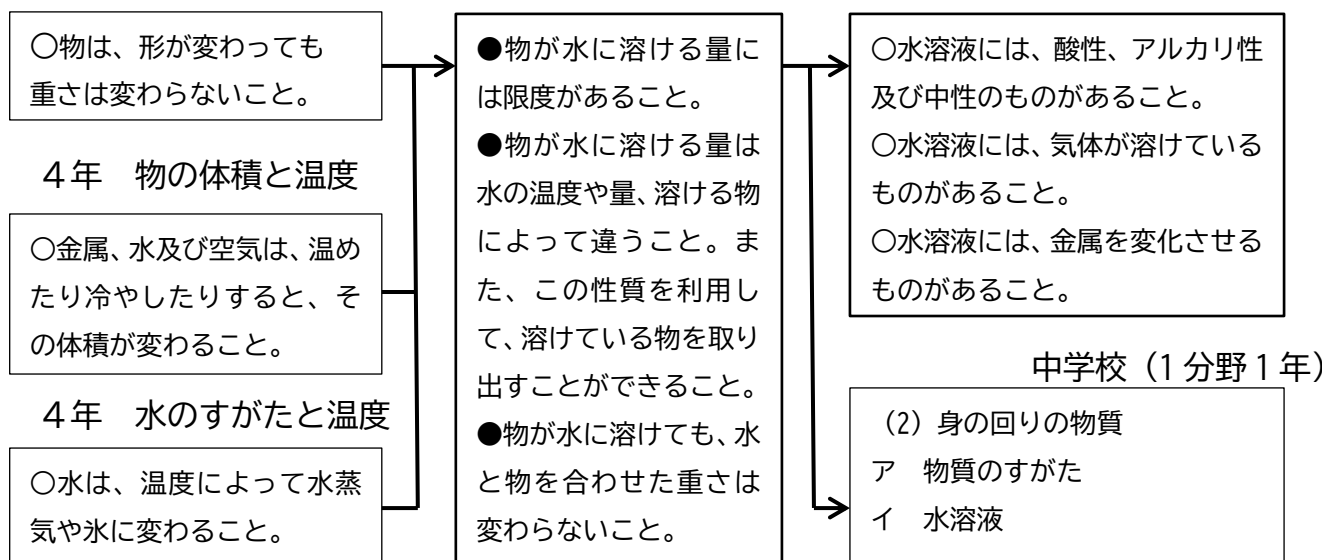
まず、導入部分では、児童の生活に身近なものを溶かす共通体験から、ものが溶けることに対する疑問を持ち、解決する課題を明確にして取り組ませたい。また、実験のときには、自分の予想と他者の予想を比較することで多様な考え方に触れ、自分の考え方を広げていけるようにする。既習の知識や、前単元で学んだことに触れ、意見が広がるように進めていきたい。また、児童が計画して実験を行う機会を設定することで、実験結果を活用して課題解決の方法を考え、知識を深めるとともに、科学的な思考や表現ができるようにつなげていきたい。実験においては、役割分担を考え、どの児童も責任感を持ちながら意欲的に取り組めるようにする。実験などの際は、児童が道具の取り扱いに慣れ、安全に実験を行えるようにするため、十分に時間を取って丁寧に取り組ませたい。通常、主指導者1名のみで授業を行うが、本時の学習では安全の確保のため補助としてT2が入り実験を行うようにする。

【参考】内容の関連

3年 物の重さをくらべよう
き

【本単元】

6年 水溶液の性質とはたらき



7. 単元（題材）の評価の観点

関心・意欲・態度	知識・理解	思考・判断・表現	技能
・興味を持って、意欲的に観察や実験に取り組む。	・物が水に溶けるときの決まりについて理解している。	・実験結果から分かることについて考え、自分の考えを表現している。	・実験道具の使い方が分かり、正しい手順で実験を行っている。

8. 単元の指導と評価の計画（全14時間、本時は第13時：第三次4／5）

次	小単元名	主な学習活動	評価の観点			
			関意態	知理	思表	技能
一 (3)	「物が水にとけるとき」	・食塩、砂糖、みそなど、生活に身近な物を溶かし、物が水に溶ける様子を観察し、気づいたことを話し合う。	○			
		・食塩が水に溶けると重さはどうなるかを調べ、まとめる。		○	○	
二 (6)	「物が水にとける量」	・食塩とミョウバンが水に溶ける量には限りがあるかを調べ、まとめる。	○	○		
		・食塩とミョウバンをもっとたくさん溶かす方法について話し合い、水の量を変えて、食塩とミョウバンの溶ける量を調べる。			○	
		・水の温度を変えて、食塩とミョウバンが溶ける量を調べる。				○
		・更に水の温度を上げて、食塩とミョウバンの溶ける量を調べる。		○	○	
	「水にとけた物を取り出す」	・水溶液を冷やすと溶けていた物を取り出すことができるか調べて、まとめる。				○

三 (5)		・水溶液を熱して水を蒸発させると溶けていた物を取り出すことができるか調べて、まとめる。				○
		・学習した溶けている物の取り出し方を利用して、水溶液に溶けている物が何か調べる方法を考える。		○		
	本時	・食塩水、ミョウバン水、砂糖水を見分ける実験を行い、結果をもとにそれぞれの液体に溶けている物が何か調べる。	○		○	○
		・物の溶け方について、学習したことをまとめる。				

9. 本時の展開

(1) 小単元名：水に溶けたものを取り出す

(2) 本時の目標

- ・興味を持って積極的に実験に取り組む。(関心・意欲・態度)
- ・前時に立てた計画をもとに、正しく器具を使い、協力して安全に実験を行う。(技能)
- ・実験結果から分かったことを話し合っまとめたり、分かりやすく説明したりすることができる。(思考・判断・表現)

(3) 準備・教材等

食塩、ミョウバン、水、氷、100mL ビーカー、ガラス棒、ろうと、ろうと台、ろ紙、冷却用容器、蒸発皿、2mL こまごめピペット、電熱器、保護めがね、ぞうきん、実験用はさみ

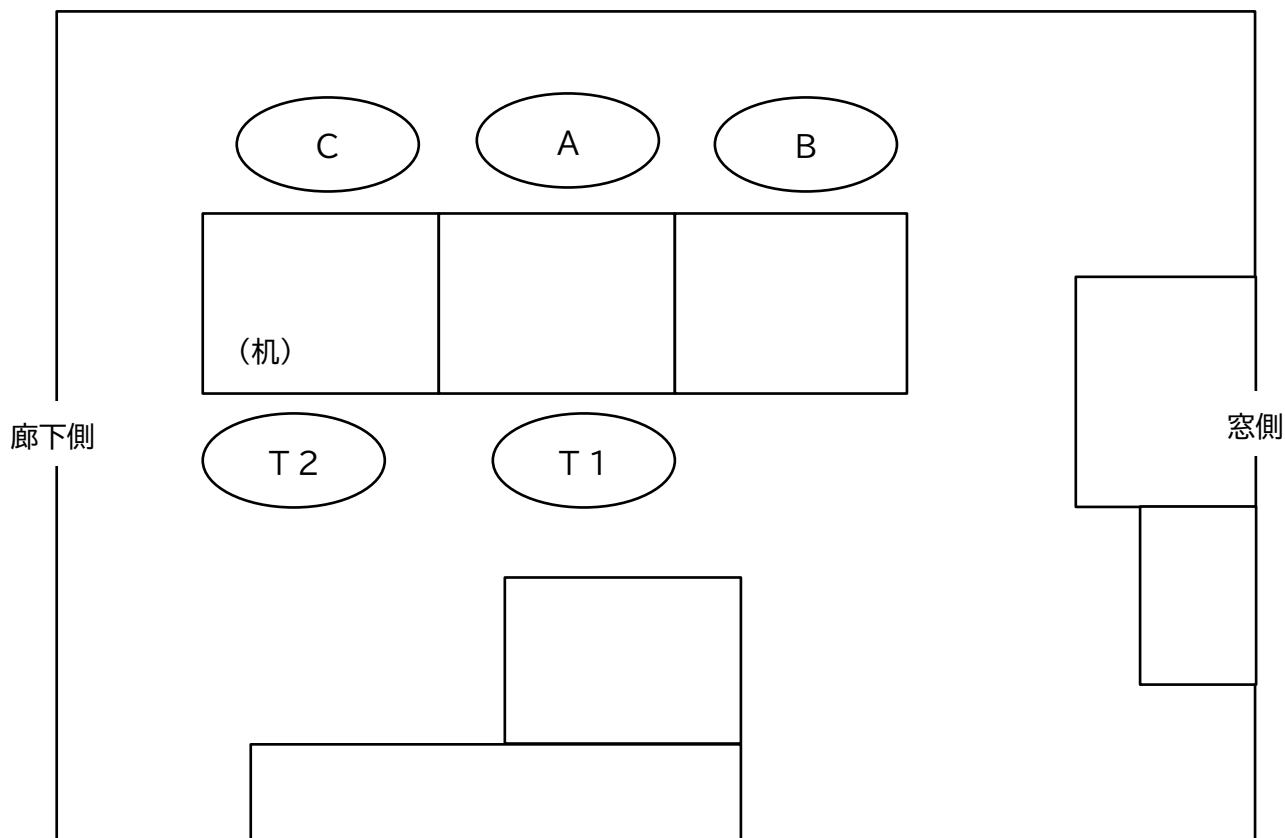
(4) 児童の実態と本時の目標

児童名	児童の実態	本時の目標
A	<p>5年女子 全盲</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理科の実験や観察に興味を持ち、積極的に取り組むことができている。 ・動作の獲得に時間がかかることが多く、実験などで作業を行う場合は援助が必要である。 ・実験結果や既習の事項から応用して考えたり、分かりやすくまとめて説明したりすることに課題があるが、積極的に発表することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・丁寧に作業をし、協力して安全に実験を行う。【技術】 ・実験結果から分かることを分かりやすくまとめて説明したり、発表したりすることができる。【思・判・表】
B	<p>5年女子 弱視</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理科の事象に関心が薄いことがあり、内容によっては積極的に取り組めない様子も見られるが、役割分担をするなどして必要なことが分かれば、丁寧に作業をすることができる。 ・発表などの際は消極的になりがちであるが、既習の事項や実験などの結果をもとに、分かることをまとめたり、応用して考えたことを順序立てて説明することができつつある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・興味を持って取り組み、協力して安全に実験を行う。【関・意・態】 ・実験の結果から分かることについて分かりやすく説明したり、他の児童の意見を聞いてまとめたりすることができる。【思・判・表】
C	<p>5年男子 弱視</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実験や観察に興味を持ち、積極的に取り組むことができている。 ・丁寧な作業が苦手であるが、声かけを聞き、気をつけて取り組もうとしている。 ・既習の事項や実験などの結果をもとに応用して考えようとしているが、自分の考えをまとめて書いたり、発表したりすることに課題がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・丁寧に作業をし、協力して安全に実験を行う。【技能】 ・実験の結果から分かることを分かりやすくまとめて説明したり、発表したりすることができる。【思・判・表】

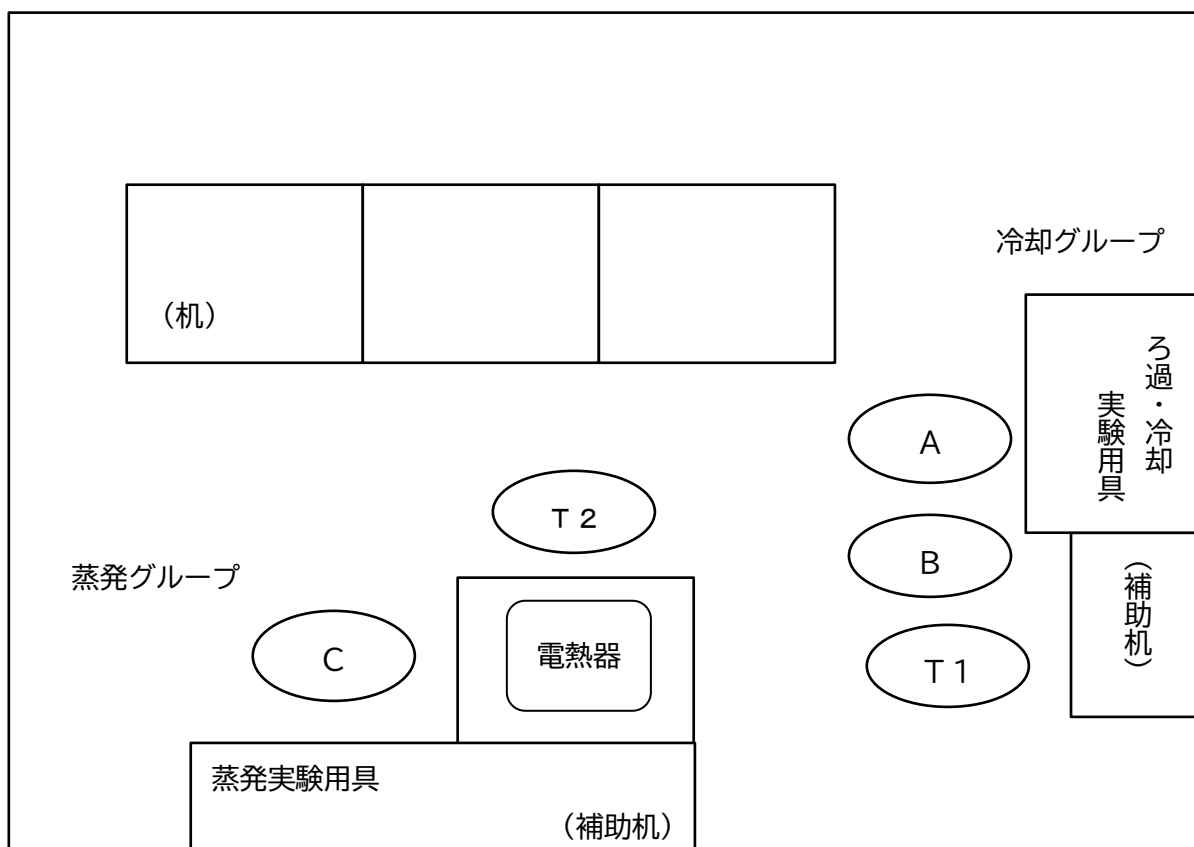
10	<p>(2) 電熱器の上に蒸発皿を一枚ずつ乗せ、加熱する。</p> <p>(3) 蒸発皿が冷めたら、観察をする。</p>	<p>めてから行わせる。</p>	
3	<p>3. 結果から分かることを考察し、話し合う。</p> <p>「Aは冷却すると結晶が出てきたからミョウバンかな」</p> <p>「Cは蒸発させるとたくさん結晶が出て、冷却しても結晶は出てこなかったよ」</p> <p>「Bは蒸発しても冷却しても結晶が出たから…」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの結果を確認させる。 ・実験結果を記録したカードや、実験中の様子をもとに意見を出し合い、結果から分かることをまとめるよう伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実験結果から分かることを、話し合っ てまとめたり、分かりやすく説明しようとしている。
2	<p>4. 話し合っ てまとめた内容を発表する。</p> <p>5. 謎の液体Xの正体を知り、学習の振り返りをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・発表する人を一人決め、発表させるようにする。 ・自分たちで考えて解決できたことを明らかにし、学習の成果を振り返る。 	<p>【思・判・表】 (行動観察、記録カード)</p>

(6) 教室配置

〈導入・記録・まとめ〉



〈実験〉



「自立活動（音楽活動）」 学習指導案（略案）

指導者	T 1	辰巳 純子
	T 2	伊佐敷 香奈
	T 3	寺井 伸太郎
	T 4	中村 美咲
	T 5	西山 侑邑
	T 6	祢宜 志枝
	T 7	綿谷 彰人
	T 8	松尾 賢喜

1. 日 時 令和元年〇月〇日(〇) 第2時限（9：50～10：35）
2. 対 象 小学部1・2・4・5・6年 児童8名
3. 場 所 プレイルーム
4. 単元名 リズムに合わせた身体表現
5. 単元の目標
 - ・音楽に合わせて楽しく体を動かしたり声を出したりすることができる。
 - ・音楽に合わせてのびのびと体を動かすことができる。

6. 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入 (5分)	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶及び出欠確認をする。 ・行進をする。 ♪小さな世界♪ 	<ul style="list-style-type: none"> ・日直が当番すること、大きな声で挨拶をすることを伝える。授業の始まりが意識できるように、指導者はメリハリをつけて話す。 ・ぶつからないように気をつける ことを伝え、児童につく指導者は、安全に行進できるように配慮する。 ・全体を通して、聞き取りやすい声で指示する。 	
展開① (約10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・動物体操を行う。 ぞう・きりん・蛙 とんぼ・くま・蝶 かたつむり 白くま 	<ul style="list-style-type: none"> ・1つ1つの動きを丁寧にできるよう、伴奏はゆっくりと弾く。 ・1つの動きは2回ずつ繰り返して伴奏する。 ・体を大きく動かすことができるように児童の位置を確認しながら伴奏する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・曲に合わせて楽しくのびのびと体を動かすことができる。 【関心・意欲・態度】

	<ul style="list-style-type: none"> ・リトミックを行う。 歩く・走る・回転・ 反対回転・寝転ぶ・ 足ふみ・向きを変える・後ろ歩き・その 場駆け足・ カッチンコッチン 	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ曲でも、ゆっくり伴奏したり早めに 伴奏したりして、曲調の違いを感じて体 を動かせるように工夫する。 ・手引きや声かけ等の支援の方法は、児童 に応じて変えるなど配慮する。一人でで きる動きは見守りや声かけだけにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノ伴奏の曲 調の違いを聞いて、体の動かし方 を変えることができる。 【技能】
<p>展開② (約25分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本日の活動を行う。 ♪わくわく リトミック♪ 『探検に行こう！』 ♪歩こう地球探検隊♪ ジャングル探検 (スズランテープの 下をくぐる) 小川をまたぐ 洞窟探検 (体を屈めて進む) ・本日の歌を歌う。 ♪パワーのマーチ♪ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノの近くに集合させ、円になって座 らせる。 ・児童の側につく指導者は、盛り上げるよ う元気に歌う。 ・前回した内容を少し思い出させながら、 本日の取り組みに興味を持てるよう、期 待感を待たせるように授業をすすめる。 ・小道具をセットする際には、子どもたち に危険がないように注意する。 ・できるだけ一人でできるよう、支援の 仕方を工夫する。 ・元気に声を出したり楽しく体を動かし たりしながら歌うように声をかける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌に合わせて楽 しく体を動かす ことができる。ま た、ねらいに合わ せた体の使い方 ができる。 【技能】 【関心・意欲・態度】 ・歌詞を覚えて歌 うことができる。 また、体を動かす ことができる。 【技能】
<p>まとめ (5分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のまとめ ・次週の予告 ・挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ・今日行った活動を再度確認させること で、授業を振りかえることができるよ うにする。 ・友だちの頑張りを共有できるように、特 に頑張っていた様子は発表する。 ・見通しが持てるように、次週の内容や予 定を伝える。 ・姿勢を整えさせ、当番には大きな声で号 令をかけさせることで授業を締めくく る。 	

「自立活動（ADL（身体）」 学習指導案（略案）

指導者（T1）辰己 祐幸
 T2 仙田 和枝
 T3 榎島 有希
 T4 中川 恭子
 T5 村本 佳恵子
 T6 宮口 都史子
 T7 村上 博紀

1. 日 時 令和2年〇月〇日（〇） 第4時限（11：50～12：40）
 ※後半12：20～は給食準備に入るため、活動は12：20まで
2. 対 象 中学部1・2・3年 生徒8名
3. 場 所 中学部HR教室
4. 単元名 コグトレ
5. 単元の目標（ねらい）
 - ①コグトレ棒を活用したトレーニングを通して、ボディイメージを高め、背中や頭、ひじを伸ばす、身体を左右に傾ける、左右にひねるなどの身体感覚を確認する。
 - ②片脚立ちや蹲踞の姿勢などのトレーニングを通して、バランス感覚を高める。
 - ③耳で聞いて即時に反応するトレーニングを通して、聴覚認知や、聴覚情報を理解して身体を動かす能力などを高める。
 - ④低緊張などでゆっくりした動作が苦手な生徒が、教員の補助を受けながらゆっくりした動作を体験し、身体の筋肉をコントロールすることを意識する。

6. 本時の展開

	学習内容・活動	指導上の留意点・支援の手立て	評価規準（評価方法）
始業前	※始業前に特例1生徒は作業用エプロンを着用し、各自がコグトレ棒を持って着席しておく。	※各自の荷物を置きやすいよう、廊下側に段ボールのボックスを設置する。またコグトレ棒を保管する箱を窓側に設置する。	※一人でコグトレ棒などを準備し、始業のチャイムが鳴るまでに着席できているか。 ※必要な生徒の席には足置きを準備しておく。
導入（5分）	①あいさつをする。 ②着席した状態で基本のコグトレ（胸・前・上・首の後ろ・後）を実施する。	①生徒の興味関心を高め、また教室内の位置関係を把握できるようにT1が当日のあいさつをランダムに指定する。 ②適宜、全体を見て生徒の姿勢を確認し、生徒への声かけや他教員への指示をする（T1）。以下※1と省略する。	①生徒同士の位置関係を意識できているか。 ②背中やひじが伸びているか、頭を傾けているか。

		各生徒へ注意や姿勢の確認などを行う（T2～T7）。以下※2と省略する。	
	③1つのトレーニングが終わる毎にコグトレ棒を机の上に置いて休憩する。 ※以下、休憩と記載	③生徒が集中して取り組めるように、トレーニングと休憩を短時間で繰り返す（以下省略）。	③コグトレ棒を大きな音をたてずずっと机の上に置くことができるか。
展開①※展開①～⑤で23分	①コグトレ棒を上には伸ばした状態で、身体を左右に傾ける。 →休憩 ②コグトレ棒を首の後ろに持ってきた状態で、身体を左右にひねる。 ③コグトレ棒を上には伸ばした状態で、身体を左右にひねる。 →休憩	①コグトレ棒を短く持ち、頭を挟むようにすること、足裏を床につけることを指示する。 ※1、2 ②足裏を床につけることを指示する。 ※1、2 ③コグトレ棒を短く持ち、頭を挟むようにすること、足裏を床につけること、直前のひねる姿勢のイメージを思い出すことを指示する。	①両足が床についているか、背中やひじ、頭が前後へ曲がっていないか、背中、腕、頭がまっすぐの状態に左右に傾いているか。 ②頭、背骨、腰がまっすぐの状態に身体を左右にひねられているか。 ③頭、背骨、腰がまっすぐの状態に身体を左右にひねられているか。
展開②	①起立する。 ②立った状態で、コグトレ棒を胸、へそ、膝の前までもっていき、前屈のストレッチをする。 ③コグトレ棒を前から後ろへまたぐ。 ④コグトレ棒を膝裏から、お尻、背中と上に挙げ、肩甲骨を伸ばすストレッチをする。 ⑤コグトレ棒を膝裏に戻し、後ろから前へまたぎ、膝の前、おへそ、胸へと戻す →休憩	①起立し、机から一步後ろへ下がるよう指示する。 ②膝を曲げないように指示する。 ※1、2 ③バランスの不安定な生徒には適宜補助をする。 ※1、2 ④腰を曲げないように指示する。コグトレ棒を上には挙げるサポートをする。 ※1、2 ⑤バランスの不安定な生徒には適宜補助をする。 ※1、2	②膝を曲げずに前屈の姿勢をとれているか。 ③バランスを保ってコグトレ棒をまたげているか。 ④腰を曲げずに立った姿勢のままでコグトレ棒を挙げる事ができているか。 ⑤バランスを保ってコグトレ棒をまたげているか。

<p style="text-align: center;">展開③</p>	<p>①片脚立ちを右（20秒、10秒、5秒）、左（20秒、10秒、5秒）をする。 ※コグトレ棒は机の上に置いたままにしておく。</p> <p>②蹲踞（そんきょ）の姿勢を20秒間キープする。 →休憩</p>	<p>①秒数をカウントする。 バランスの不安定な生徒には適宜補助をする。 なるべくいすや机を持たないようにすること、脚は膝を曲げるようにすること、残っているほうの足に重心を乗せることを指示する。 秒数を徐々に短くすることで最後の5秒間は何も持たず片脚立ちできるよう意識させる。 ※1、2</p> <p>②秒数をカウントする。 バランスの不安定な生徒には適宜補助をする。 可能な生徒には背中を伸ばし、手を膝から離すよう伝える。 ※1、2</p>	<p>①机やいすを持たずにバランスを保っているか。</p> <p>②蹲踞の姿勢（しゃがみこみ、かかとを挙げ、背中を伸ばして顔を挙げ、手を離す）でバランスを保つことができるか。</p>
<p style="text-align: center;">展開④</p>	<p>①着席する。</p> <p>②聴覚認知トレーニングA 胸、前、上、後（首の後ろ）の指示に合わせてコグトレ棒を動かす。 →休憩</p> <p>③聴覚認知トレーニングB 胸を1、前は2、上は3、後は4と確認し、1、2、3、4の指示に合わせてコグトレ棒を動かす。 →休憩</p>	<p>①着席し、コグトレ棒を持ち胸の前でキープするよう指示する。</p> <p>②生徒が聞き取りやすいよう、はっきりした声で指示をする。 後半は難易度を上げ、前、上、前、上、前、上、後など単調なリズムからの転換などを行う。 ついていくのが難しい生徒を適宜サポートする(T2~7)。 ※1、2</p> <p>③②に加えて、ワーキングメモリの訓練も兼ね、部位と数字の位置関係を記憶したままでトレーニングを行う。</p>	<p>②耳から聞いた指示を聞き間違いせず、瞬時に理解し、その指示に合わせた動作をすることができるか。</p> <p>③耳から聞いた指示を聞き間違いせず、瞬時に理解し、数字を各部位に変換し、その指示に合わせた動作をすることができるか。</p>
	<p>①起立する。</p>	<p>①起立し、コグトレ棒を持って、机から一歩後ろへ下がるよう指示する。</p>	

展開⑤	<p>②コグトレ棒の端を右手で持ち、反対の端を床へ向ける。そこから腕を伸ばしてコグトレ棒を大きく回す。下→右→上→左→下のそれぞれを3秒かけてゆっくりと回転させていく。</p> <p>③コグトレ棒を左に持ち替え、反対回転で同様に大きくゆっくり回していく。</p>	<p>②肘を伸ばし、コグトレ棒の先が外側に引っ張られているようなイメージで下→右→上→左手に持ち替える（右手は下げる）→左→下と回転するよう指示する。低緊張ぎみの生徒はゆっくりとした動きが苦手なので、指導者が腕を抑えながら腕をゆっくり動かすようにサポートする。</p> <p>※1、2</p> <p>③②同様。</p>	<p>②肘を伸ばせているか、コグトレ棒の先を外側に向けられているか、腕を大きく回すボディイメージができていないか、背中や頭を伸ばせているか、3秒かけてゆっくりと動かすことができているか。</p> <p>③②同様。</p>
まとめ(2分)	<p>①着席する。</p> <p>②ふりかえりを聞く</p> <p>③あいさつをする。</p>	<p>①着席して机の上にコグトレ棒を置く。</p> <p>②本日の振り返りと次回授業の指示をする。</p> <p>③生徒の興味関心を高め、また教室内の位置関係を把握できるようにT1が当日のあいさつをランダムに指定する。</p>	<p>①コグトレ棒を大きな音をたてずそっと机の上に置くことができているか。</p> <p>②指導者のほうを向き、聞く姿勢（背中を伸ばし、顔を上げ、手を太ももに置く）ができているか。</p> <p>③生徒同士の位置関係を意識できているか。</p>
終業後	<p>※始業後に特例1生徒は作業用エプロンを脱いでなおし、各自がコグトレ棒を返却する。</p> <p>※その後、給食用エプロンを着用して手を洗い、給食準備に移る。</p> <p>※必要な生徒は先にトイレに行く。</p>	<p>※各自の荷物を置きやすいよう、廊下側に段ボールのボックスを設置する。またコグトレ棒を保管する箱を窓側に設置する。</p>	<p>※一人でコグトレ棒の収納やエプロンの着脱などの準備ができているか。</p>

【参考】コグトレについての紹介と4月からの変遷

コグトレとは「認知トレーニング (Cognitive Training)」の略で、立命館大学教授宮口幸治さんが提唱されているものです。もともと少年院でのグレーゾーンの子を対象に、社会面や学習面、身体面の認知機能を高めるために開発されたもので、現在は支援学校や通常学校でも広く行われています。

指導者 (T1) は、数年前にこのコグトレの研修会に数回参加し、その中の認知作業トレーニング・コグトレ棒を使った身体トレーニングが視覚障がいのある子たちのボディイメージや聴覚認知機能の向上に効果があるのではないかと考え、まず平成28年度から高等部普通科C類型で、平成31年度から中学部の特例1の課程で取り組んでいます。

当初はコグトレ棒を持って、肘を伸ばすことができない (まっすぐのボディイメージが持てない)、身体を左右に傾けることができない (体を傾げるつもりで腕だけ捻っている、頭が傾かない) などの様子が見られました。子どもたちはそんな実態なので、体育のラジオ体操の姿勢も指定された姿勢をとることができておらず、また指定された姿勢のボディイメージも理解できていなかったため、本人たちは自分が正しい姿勢ができていると考えており、姿勢を修正するよう指導してもなかなか理解できずその内容も定着しませんでした。

また筋肉量や運動時間が十分でなかったようで、当初は「疲れた」「しんどい」と声を上げるような状況でした。

そこから徐々にトレーニングを通して、1学期の後半には、コグトレ棒を持つことで肘を伸ばすボディイメージが、背中や後頭部を壁につけることで背中を伸ばして頭を上げるボディイメージが向上し、普段の着席時の姿勢や体育のラジオ体操、整列で肘や背中を伸ばす姿勢が見られるようになってきました。コグトレにも慣れ、体力もつき途中で「疲れた」「しんどい」と言うこともなくなり、子どもたちは楽しんで参加する様子が見られるようになりました。ボディイメージを高めるために、コグトレ棒の端を片手で持ち、棒の反対側の端で、左肩やおへそ、つむじなど指定された部位をタッチする取り組みも行いました (同時に身体のさまざまな部位名も確認しました)。

指示される姿勢のボディイメージを繰り返して確認し、自分で背中を伸ばす、肘を伸ばすなどの姿勢と、それまでの自分の中の背中を伸ばす、肘を伸ばすイメージの違いがわかるように

なった結果、それまでラジオ体操などで姿勢の修正を指示されても全く聞き入れなかった子が、「この姿勢はコグトレの〇〇と同じだよ」と伝えることで自分の姿勢を変えるようになり、こちらのアドバイスを聞き入れて自分の姿勢を修正するようになりました。

2学期からは、基本的な背中を伸ばす、肘を伸ばす、身体を傾ける、ひねるなどのイメージがついてきたので、具体的なラジオ体操の動きと関連させた指導をはじめました。

「コグトレのこの姿勢はラジオ体操の〇〇と同じ動き」と伝えることで、自ずから体育でのラジオ体操の動きも修正されました。

また次のステップとして、掌の向きや、前に習えの姿勢や深呼吸時などで指先をまっすぐ伸ばす感覚とイメージを繰り返し確認しました。特に指先まで伸ばすイメージは、「指先まで伸ばす」という指示では指先が手の甲側に反ってしまい、「指と指の間をくっつける」という指示では親指が人差し指とくっついてお椀型の手になるなど、指示の仕方も試行錯誤しましたが、「いただきますの手（合掌）のまま右手と左手を離す」という指示で子どもたちはイメージすることができました。

それ以外でも、例えば蹲踞の姿勢はフロアバレーボール前衛のブロックと同じ姿勢と関連づけ、フロアバレーボール前衛のアタックやグラウンドソフトボール打者のバッティングなど体重を後ろ（右利きの場合は右側）にためて打つ瞬間に前（右利きの場合は左側）に傾けるイメージなども確認しました。

2学期の後半からはコグトレの中の力の加減や調整にも取り組みました。具体的には、①合掌の姿勢で自分の右手と左手を押し合い、両方の力が釣り合うように調整する→両手で壁を押す→教員と生徒が向かい合ってそれぞれの両手の掌を合わせて押し合い、ちょうど力が釣り合うように調整する→生徒同士で取り組む、②背中で壁を押す→背中を壁につけたまま、壁を押しながら膝を曲げていき徐々に立ち上がる→教員と背中を合わせて肘を組み、お互いに背中を押しながら立ち上がるなどという内容です。

なかなか他者と力を合わせる、自分の力を調整するという機会のない子どもたちにとって良い経験になったようです。

また PT（理学療法士）来校支援から、多くの複数の生徒たちが低緊張気味で筋肉量（特に遅筋）も弱いため、身体をゆっくり動かすことが苦手ではないかという指摘がありました。そこ

で特に腕を伸ばしてコグトレ棒を大きく時計の針のように回す動きで、指導者が早く動かそうとする腕を押しとどめながら動かすことで、ゆっくりの動きの感覚を繰り返し確認することにも取り組んでいます。

3学期からは、移動時間のために授業時間が短くなるという欠点があるのですが、コグトレ棒はあまり使わず、柔道場に移動し、背中や後頭部を壁につけるなど壁を利用した取組みや他者に合わせて力加減を調整する取組みなどの時間も設定しています。

このようにコグトレを通した様々な姿勢や動きの確認と繰り返しによってボディイメージが高まり、話を聞いたり学習や食事をする際の座った姿勢やラジオ体操、スポーツなどでの動きなどで指示された姿勢が取れたり、新しい動きを学ぶ際の理解と定着に繋がっていることを実感しています。

国語科「現代文B」 学習指導案（細案）

指導者 吉岡 直也

1. 日 時 令和元年〇月〇日（〇） 第2時限（9：50～10：40）
2. 対 象 高等部普通科A類型2・3年 生徒2名
3. 場 所 高等部普通科2A教室
4. 単元名 「詩歌」 東京書籍 新編現代文B 春雷【俳句】（pp.266-268）
5. 単元の目標（ねらい）
 - ・俳句独特の特徴を理解する。
 - ・多義的な表現を理解する
 - ・解釈の多様さを理解する。

6. 指導にあたって

（1）生徒観

本学習クラスは墨字使用生徒2名で構成されるクラスである。

授業への取り組み姿勢は、指導者の話をしっかり聞いて考えることができるが、場面をイメージする際に主観の域を超えることができず、「では、別の考え方にはどのようなものがあるか」等の発問に対しては答えることができない場面が多い。また、漢字の書き取りにも課題が見られ、誤字・脱字が多く板書の書き取りでは時間がかかり漢字間違いが無いかの確認も必要である。

（2）教材観

本教材は、作品の時代・テーマが偏ることなくバランスよく配列されているので、「近代以降の様々な文章を的確に理解」する能力を高めることができる。また、評論、小説、随想を軸に、さまざまなジャンルの文章に触れることができるように配慮されている。本校において本科目は2年次・3年次の分割履修を行っており、2年間でジャンルを偏らせることなく、評論、小説、随想などを均等に取り上げている。

本単元で取り扱っている俳句に関しても明治～平成にかけて著名な俳人を取り上げ、様々な題材や句風にふれることができる。この学習を通して、生徒が主観だけに囚われず解釈の多様さや多義的な表現を理解することの一助としたい。

（3）指導観

本単元では、電子黒板を活用することで板書をする時間を減らし、生徒の内容理解をする時間を十分に確保したい。また、電子教材で作者の写真や題材にされている事物の映像を映すことで、生徒のイメージを膨らませ、興味・関心をひきつける環境を作る。従来の授業では指導者から生徒への発問形式で授業を進めることが多かったが、生徒同士で話し合う場面を積極的に設け、場面理解において生徒の自由な感想を引き出したい。

7. 単元（題材）の評価規準

A 関心・意欲・態度	B 話す・聞く能力	C 書く能力	D 読む能力	E 知識・理解
①学習内容や電子黒板の内容で気付いたことや必要なことをワークシートにメモできる。	①他生徒と学習内容について積極的に意見交換し、発表できる。	①誤字・脱字をしないように意識してワークシートに記入することができる。	①区切れを意識して俳句を詠むことができる。 ②俳句について多義的な解釈ができる。	①俳句の基礎知識を確認し、季語や区切れについて理解している。 ②句の内容・伝えたいことについて自分なりの感想を持つことができる。

8. 単元の指導と評価の計画（全6時間、本時は第5時）

次	時	学習内容	指導上の留意点	評価規準 (評価方法)
第一次	1～2	・俳句の基礎知識について (音数・季語・区切れ・取り合わせ・一物仕立て)	・俳句の導入として、基礎知識を生徒に発問しながら確認する。 ・「取り合わせ」や「一物仕立て」などは分かりやすい例を挙げながら説明する。	A① C① E①
第二次	3～4	・村上鬼城、加藤楸邨の俳句鑑賞	・作者の生い立ちや背景を説明し、俳句に込められた想いが理解できるように促す。 ・聞き慣れない事物に関しては、実際の写真などを用いて説明する。	A① B① C① D①② E①②
	5(本時)	・池田澄子の俳句鑑賞	・句の発話者について多義的な解釈ができるように語句の確認や作者の背景について説明する。	A① B① C① D①② E①②
第三次	6	・坪内掇典の俳句鑑賞 ・まとめ	・坪内の俳句について、区切れを確認し、場面の多義性を指導する。 ・まとめでは本単元で取り扱った俳句を振り返り、好みの俳句とその理由を生徒に考えさせる。	A① B① C① D①② E①②

9. 本時の展開

(1) 本時の目標

- ・池田澄子の句について生の偶発性をつかむ。
- ・句の発話者について多義的な解釈ができる。

(2) 本時の評価規準

A①、B①、C①、D①②、E①②（7. 評価規準 参照）

(3) 本時で扱う教材・教具

東京書籍 新編現代文B教科書、ワークシート、電子黒板

(4) 生徒の実態と本時の目標

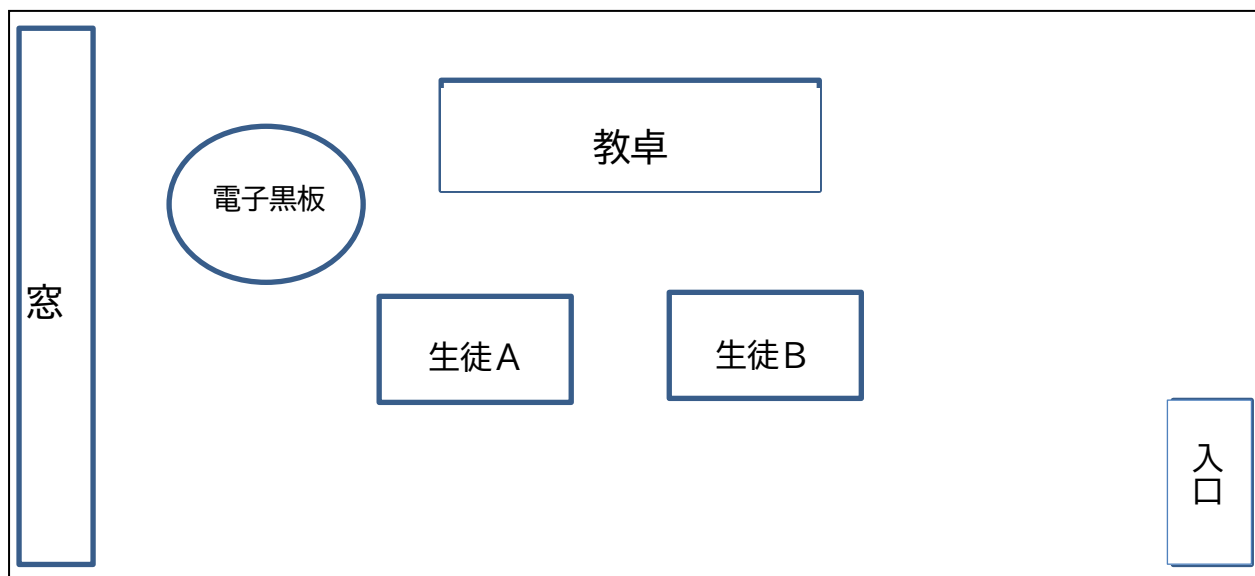
	生徒の実態	本時の目標	支援の手だて	評価規準
A	弱視生徒。黒板の板書は着席した状態で視認できる。習得漢字は小学1～2年生程度。書字の際に、誤字・脱字が多い。理解力は高く、自分なりの感想・意見を述べることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに記入する際に、誤字・脱字をしないように意識して書くことができる。 ・句の発話者について多義的な解釈ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・机間巡視を行い、誤字・脱字が無いか確認する。 ・句の場面別に電子黒板の映像を提示し、生徒のイメージを膨らませる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・電子黒板で提示される作者の背景や季語・区切れについてワークシートに記入できる（A①、C①、E①） ・ディスカッションの際に、この俳句は何を伝えたいのか、自分なりの意見を言うことができる。（B①、D②、E②）
B	弱視生徒。黒板の板書は着席した状態で視認できるが、細かな部分を確認する際に近づいて確認する場合がある。習得漢字は小学3～4年生程度。書字の際に、誤字・脱字が多い。読解力に課題が見られ、作者の思い	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに記入する際に、誤字・脱字をしないように意識して書くことができる。 ・ディスカッション時、積極的に意見を述べ、発表することができる。 ・句の発話者について多義的な解釈ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・机間巡視を行い、誤字・脱字が無いか確認する。 ・生徒から出た意見を認め、発表しやすい環境を作る。 ・句の場面別に電子黒板の映像を提示し、生徒のイメージ 	<ul style="list-style-type: none"> ・電子黒板で提示される作者の背景や季語・区切れについてワークシートに記入できる（A①、C①、E①） ・ディスカッションの際に、この俳句は何を伝えたいのか、自分なりの意見を言

や行間を読み取る ことが苦手である。	を膨らませる。	うことができる。 (B①、D②、E ②)
-----------------------	---------	----------------------------

(5) 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点及び支援の手だて等	評価規準 (評価方法)
10分 導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつをする。 ・前時の学習内容を確認する。 ・本時の学習内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までのワークシートを確認し、季語・区切れ・内容を中心に発問する。 ・前時の最後に予告した本時の学習内容を覚えているか確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> A① E①、② C① (授業全体を通して)
35分 展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・俳句を音読する。 ・初発の感想をディスカッションする。 ・作者について確認する。 ・俳句で用いられることばの確認を行う。 ・この句の発話者について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音読の際に、生徒は指導者に続いて音読する。 ・ディスカッションの時間は十分に確保する。(10分間) 発表は生徒Bを指名する。 ・作者について簡単な説明を行った後に、今までの俳句とは異なり、口語体という部分に着目する。 ・ことばの確認では「じゃんけん」について勝ち負けを決めるだけのものではないことを説明する。 ・発話者についての説明は、生徒の興味関心を引くスライドを展開し、自身の考えとは異なる解釈も受け入れられる環境を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・D① ・B①、E② ・A① ・D② ・D②
5分 ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・この句について伝えたいことを確認する。 ・次回予告 	<ul style="list-style-type: none"> ・内容について、生徒の意見を受け入れつつもこの句が伝えたい生命観を重点的に説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・D②、E②

(6) 教室配置等（正面を上にして、児童生徒や教員の位置、準備した教材・教具の位置、配置等を示す。）



英語科「英語」 学習指導案（細案）

指導者T1	西村 彩
T2	滝口 寛紀
T3	伊藤 ひとみ
T4	Don Ellison

1. 日 時 令和2年〇月〇日（〇） 第2時限（9：50～10：40）
2. 対 象 高等部普通科B類型1・2・3年 生徒8名
3. 場 所 高等部普通科B2教室
4. 単元名 Presentation of Baseball
5. 単元の目標（ねらい）
 - ・日米野球についてのプレゼンテーションの内容を理解する。
 - ・合同英語発表会においてプレゼンテーションを行う。

6. 指導にあたって

（1）生徒観

本学習クラスは点字使用生徒3名、墨字使用生徒5名で構成されるクラスである。

授業への取り組み姿勢は個人差が大きく、初対面の人とのコミュニケーションが苦手な生徒や、英語学習に苦手意識のある生徒がいる一方、積極的に他者と関わることの好きな生徒もいる。指導にあたっては、生徒の実態や特性をふまえ、間違いを恐れずに発音や発話を促すような声かけや、自分から話す時と話を聞く時を意識させるような声かけを適宜行うことが必要である。

（2）教材観

今年度生徒たちは文化祭で野球をテーマにした劇を上演し、英語の応援歌 Take me Out to the Ball Game を舞台上で歌った。本教材は、日米の野球について、その起源や野球のボールの材質、使用するボールの日米での違い、試合のルールや応援の文化の違いについての説明文である。普通科英語科教員がT-NETや地域の人材のアメリカ人講師に助言を受けて作成したオリジナル教材であるが、文法事項については現在形・過去形・未来形の時制が混在し、受動態が多用されており、高校中級程度の内容である。生徒たちにとって難易度は高いと思われるが、身近な題材である野球をテーマに、まとまりのある英文を暗誦することで、生徒が音声面から英文全体を捉え、内容を理解する力をつけることができると考える。

（3）指導観

本単元では、教材を合同英語発表会でのプレゼンテーションとして8つのパートに分け、生徒1にパートずつ担当させる。それぞれのパートの音源を教員の声で録音し、生徒が聞いて練習できるようにする。また、導入時に外国人講師から野球についての話を聞いたり、実際に日米それぞれのボールに触れたりすることで生徒の興味・関心を惹きつけ、英語で発表すること

への抵抗感を低くしたい。また、音読・暗誦の練習にチームティーチャーや外国人教員がひとりずつ指導にあたることで、生徒が安心感を得て、自主的に練習できるようにしたい。

7. 単元の評価規準

ア. コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ. 外国語表現の能力	ウ. 外国語理解の能力	エ. 言語や文化についての知識・理解
① 英語で挨拶ができる。 ② 音読、暗誦の練習をしようとしている。	・まとまった内容の英文を理解し、自分のパートを発表できる。	・発表したプレゼンテーションについて、大まかな内容を理解できる。	・プレゼンテーション原稿の日米の野球文化について理解している。

8. 単元の指導と評価の計画（全6時間、本時は第5時）

次	時	学習内容	指導上の留意点	評価規準 (評価方法)
第一次	1～2	・プレゼンテーションの内容について	・導入として、野球の基礎知識を英語で説明する。外国人講師がプレゼンテーションの原稿を音読し、自分のパートを意識して聞くようにさせる。	ア①② エ
第二次	3～4	・プレゼンテーション原稿を音読、暗誦する	・教員の声を各生徒のICT機器に録音し、繰り返し聞いて覚えるよう促す。 ・日米で異なる野球ボールに実際に触れながら理解させる。	ア①② イ
	5（本時）	・発表会の様子を振り返る	・自分の発表について振り返り、達成感を持たせる。ゲストの評価や感想シートのコメントを伝える。	ア① ウ エ
第三次	6	・プレゼンテーション原稿について、改めてプレゼンテーション原稿について理解を深める。	・各段落について、全員で意味を確認させる。ゲストティーチャーに伝わりやすい声で発表させる。	ア① イ ウ

9. 本時の展開

(1) 本時の目標

- ・プレゼンテーション原稿の英文はどのような内容だったのか、全体を理解する。
- ・プレゼンテーションの自分のパートを発表する。

(2) 本時の評価規準

ア、イ、ウ（7. 評価規準 参照）

(3) 本時で扱う教材・教具

Presentation of Baseball

(4) 生徒の実態と本時の目標

	生徒の実態	本時の目標	支援の手だて	評価規準
A	弱視生徒。拡大文字を視認し、書字ができる。自分なりの感想・意見をわかりやすく述べることができる。	・自分のパートの内容を理解したうえで、気持ちを込めて発表できる。	・他の生徒の発言も聞きながら、文の意味を考えさせる。英語特有のアクセントに気をつけて発音させる。	・ゲストティーチャーと英語で挨拶できる。(ア①) ・スクリプトの内容について自分なりに解釈しようとしている。(ウ) ・自分のパートを最後まで発表できる。(イ)
B	弱視生徒。拡大した文字を視認することが難しく、パソコンの読み上げ機能、キーボードを使用して学習している。人前で話すことに慣れている。	・自分のパートの内容を理解したうえで、気持ちを込めて発表できる。	・野球ボールの構造をイメージしながら発表できるよう、他の生徒の発言も聞きながら、文の意味を考えさせる。	・ゲストティーチャーと英語で挨拶できる。(ア①) ・スクリプトの内容について自分なりに解釈しようとしている。(ウ) ・自分のパートを最後まで発表できる。(イ)
C	弱視生徒。拡大文字を視認し、書字ができる。積極的に人とコミュニケーションをとることができる。聞く時と話す時の切り	・自分のパートの内容を理解したうえで、気持ちを込めて発表できる。	・他の生徒の発言も聞きながら、文の意味を考えさせる。スムーズに英文が言えるように、出だしの単語を伝えるようにする。	・ゲストティーチャーと英語で挨拶できる。(ア①) ・スクリプトの内容について自分なりに解釈しようとしている。(ウ)

	替えが難しい。			<ul style="list-style-type: none"> 自分のパートを最後まで発表できる。(イ)
D	弱視生徒。拡大文字を視認し、書字ができる。以前より声は伝わりやすくなったが、わかりやすく話すことが課題である。	<ul style="list-style-type: none"> 自分のパートの内容を理解したうえで、気持ちを込めて発表できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 指導者の問いかけに答えさせることで発話を促し、文の意味を考えさせる。スムーズに英文が言えるように、出だしの単語を伝えるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ゲストティーチャーと英語で挨拶できる。(ア①) スクリプトの内容について自分なりに解釈しようとしている。(ウ) 自分のパートを最後まで発表できる。(イ)
E	全盲生徒。点字を使用。英会話に興味を持ち始めており、ICT機器を使って自主的に学習できる。	<ul style="list-style-type: none"> 自分のパートの内容を理解したうえで、気持ちを込めて発表できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 野球ボールの構造をイメージしながら発表できるよう、他の生徒の発言も聞きながら、文の意味を考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ゲストティーチャーと英語で挨拶できる。(ア①) スクリプトの内容について自分なりに解釈しようとしている。(ウ) 自分のパートを最後まで発表できる。(イ)
F	全盲生徒。点字を使用。初対面の人と話すのが苦手であるが、慣れてくると小さな声で話すことができる。	<ul style="list-style-type: none"> 初対面の人と英語で挨拶できる。 自分のパートの内容を理解したうえで、英語で発表できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の方に顔を向けて、T2と一緒に声を出すようにする。 他の生徒の発言も聞きながら、文の意味を考えさせる。スムーズに英文が言えるように、出だしの単語を伝えるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ゲストティーチャーと英語で挨拶できる。(ア①) スクリプトの内容について自分なりに解釈しようとしている。(ウ) 自分のパートを最後まで発表できる。(イ)
G	全盲生徒。点字を使用。話すときの声は小さいが、自分なりの感想や気持ちを述べることができる。	<ul style="list-style-type: none"> 初対面の人と英語で挨拶できる。 自分のパートの内容を理解したうえで、英語で発表できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手の方に顔を向けて、T1と一緒に声を出すようにする。 他の生徒の発言も聞きながら、文の意 	<ul style="list-style-type: none"> ゲストティーチャーと英語で挨拶できる。(ア①) スクリプトの内容について自分なりに解釈しようとしてい

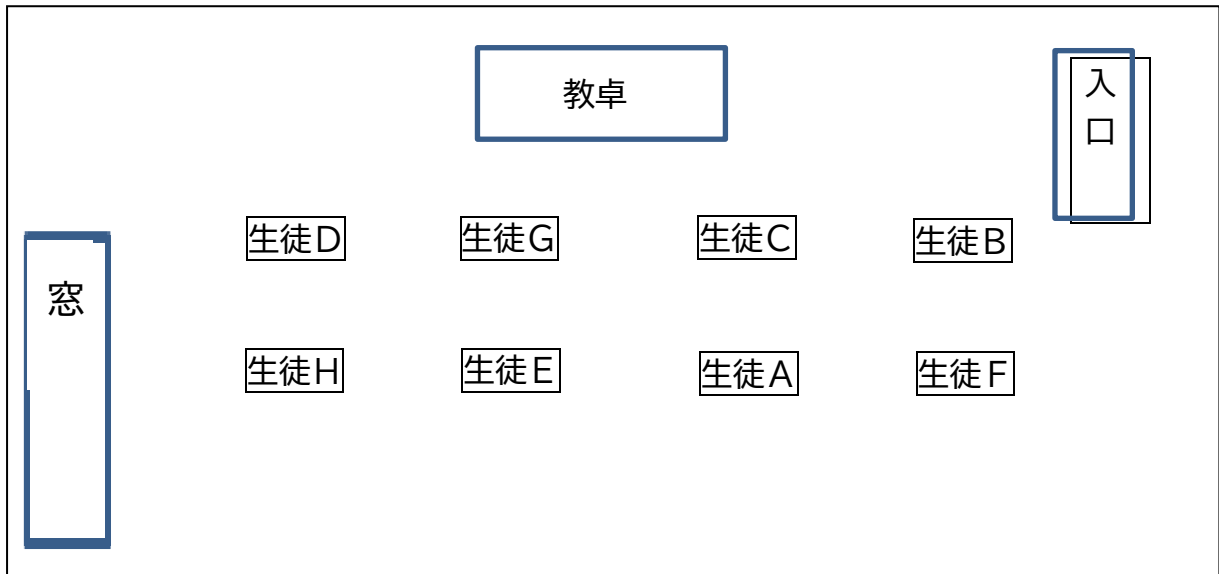
			味を考えさせる。スムーズに英文が言えるように、出だしの単語を伝えるようにする。	る。(ウ) ・自分のパートを最後まで発表できる。 (イ)
H	弱視生徒。拡大文字を視認し、書字ができる。英語学習に苦手意識があり、学習を積み上げることが課題である。	<ul style="list-style-type: none"> ・初対面の人と英語で挨拶できる。 ・自分のパートの内容を理解したうえで、英語で発表できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の方に顔を向けて、T3と一緒に声を出すようにする。 ・他の生徒の発言も聞きながら、文の意味を考えさせる。スムーズに英文が言えるように、出だしの単語を伝えるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲストティーチャーと英語で挨拶できる。(ア①) ・スクリプトの内容について自分なりに解釈しようとしている。(ウ) ・自分のパートを最後まで発表できる。(イ)

(5) 本時の学習過程

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点及び支援の手だて等	評価規準 (評価方法)
10分 導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶をする。 ・ゲストティーチャーの紹介。 ・本時の学習内容の確認。 	<ul style="list-style-type: none"> ・英語で挨拶し、ゲストティーチャーに伝わる声で自分の名前とニックネームを言わせる。 ・前時の最後に予告した本時の学習内容を確認する。 	ア① イ
35分 展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・原稿の英文の構成について、パート1、パート2～5、パート6と8、パート7の4つのテーマに分けて説明する。 ・パート1～8まで通して生徒が発表する。 ・全員でお礼を言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーション原稿について簡単な説明を行った後、4つのテーマに着目する。野球の起源、野球ボールの説明、応援について、ルールについて生徒の発言を促しながら説明する。 ・暗誦が難しい生徒は指導者(T1)に続いて発音させる。 ・Thank you for listening というフレーズを伝える。 	ウ ア② イ

5分 ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲストティーチャーの感想を聞く。 ・挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲストのコメントを、生徒が理解しやすいよう日本語でも伝える。 ・ゲストに伝わる声で英語の挨拶をする。 	ア①
-------------------	--	--	----

(6) 教室配置等（正面を上にして、児童生徒や教員の位置、準備した教材・教具の位置、配置等を示す。）



「生活と疾病（臨床医学総論）」 学習指導案（略案）

指導者 福本 大輔

1. 日時 令和2年〇月〇日（〇） 第1時限（8：50～9：40）
2. 対象 高等部専攻科保健理療科2年 生徒3名
3. 場所 理療科第5実習室
4. 単元名 第3篇 治療学総論
第2章 治療法の実際
第2節 理学療法（本時は運動療法）
5. 単元の目標（ねらい）
 - ・理学療法の種類と方法について学習する。

6. 本時の展開

	学習活動	留意点	評価基準
導入 (7分)	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者：発問により前時の復習を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発問に答えられない場合は、内容を変えて再度発問する。 	
展開① (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者：運動療法の種類とその相違点について、1名の生徒を患者役にし、説明する。 ・指導者：説明の際、MMTの内容を盛り込む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・視力での理解が難しい場合は、積極的に体に触れさせるよう促す。 ・指導者の動きや患者役の生徒の体位などがわかるように工夫して説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各運動療法の特徴を理解し、相違点についての発問に答えられるか。
展開② (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒：生徒同士でペアを組み、患者役の生徒の体を動かしながら運動療法を行い、その種類について理解する。 ・指導者：運動療法の相違点について適宜発問を行う。 		
展開③ (18分)	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者：筋力0～5のいずれかの患者になりきり、それに応じた運動療法を生徒全員に行わせる。 ・生徒：指導者を患者役に見立てて、指導者の患者想定に適した運動療法を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・術者役以外の生徒には、その様子を観察するように促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者が想定した患者に対し、最適な施術を行うことができるか。

まとめ (5分)	・指導者：本時で学習した内容の理解度を発問により確認する。		
-------------	-------------------------------	--	--

「生活と疾病（リハビリテーション医学）」 学習指導案（略案）

指導者 藤本 勲

1. 日時 令和2年〇月〇日（〇） 第6時限（14：30～15：20）
2. 対象 高等部専攻科理療科2年 生徒3名
3. 場所 理療科2年教室
4. 単元名 第4章・第7節 パーキンソン病のリハビリテーション
5. 単元の目標（ねらい）
 - ・パーキンソン病についてその症状、評価、リハビリテーションの進め方の知識を習得させる。その上で、基礎実習で学習する運動療法などと併用し、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師としてパーキンソン病の患者の治療に対応・応用するための基礎知識として活用できるようにする。

6. 指導にあたって

リハビリテーション医学の対象になるのは、主として骨関節や神経筋の疾患に由来する運動障害であるが、加齢に伴う運動障害もその対象となってきた。特にわが国では1990年代以降、高齢化が予想を超える速さで進み、ゴールドプラン、新ゴールドプランによって様々な福祉施策が進められてきている。2000（平成12）年に介護保険が導入され、リハビリテーションの必要性はますます高まり、その担い手となる理学療法士・作業療法士の養成が一気に進んできた。

パーキンソン病は、中高年を中心に発症の割合が高く、高い確率で要介護状態につながる病気の一つである。それだけに、リハビリテーションの対象となる場合も多く、とりわけ、あん摩マッサージ指圧師として高齢者施設や在宅における機能訓練指導員として患者との関わりも多くなっている。解剖学、運動学などの知識を基に、パーキンソン病の症状、評価、リハビリテーション治療についてその知識を習得させる。

7. 本時の展開

	学習活動	留意点	評価基準
導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ●前時までの復習と本時の学習内容の確認 ・前時までの学習事項について発問する。 ①パーキンソン病は脳のどの部に起こる病気か？ ②現れやすい4大症状は？ ③よく知られた重症度分類を何と言うか？ ④ステージⅠとステージⅡの違いとは？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・答えは資料の図1、図2、図4で見確認させる。 	

<p>展開① (15分)</p>	<p>●パーキンソン病の評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・①重症度の評価は既習のホーエン・ヤールの重症度分類により確認する。その際、配布した資料の図4を見ながら再確認する。 ・つぎに②機能障害の評価より生徒に音読させ、内容を説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・図を使用する際は生徒の見え方に配慮し、個別に対応する。 	
<p>展開② (20分)</p>	<p>●パーキンソン病の治療</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プリントを生徒に音読させ、ステージⅠ・Ⅱ、ステージⅢ・Ⅳ、ステージⅤのそれぞれに応じた目標やプログラム内容を説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大事な部分には下線を引かせる。また、ステージⅢ・Ⅳでは、異常歩行に対しては、視覚的にわかるよう床にビニールテープではしご状の印をつけ、そこをまたぐように歩いたり、聴覚情報を利用し「せーの、いち、に、いち、に・・・」とかけ声に合わせて歩いたりすることを伝え、実際に歩行させる。 	
<p>まとめ (5分)</p>	<p>●主な学習内容の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時で学習した内容について発問し理解度を確認する。 		

8. 参考資料

- ・『生活と疾病1 A リハビリテーション医学（概論編）』（日本理療科教員連盟教科書委員会編）
- ・『入院中のリハビリテーションーこれだけは知っておきたいベッドサイドの知識と技術ー』（総合医学社）